

論文要旨

1990年代に「BL文化」が中国に流入して以来、中国ではネットにおける「BL小説」が流行している。今日までずっと「BL小説」の数と質ははるかに「BLマンガ」を凌駕し、「BLマンガ」についても、以前は二次創作が多く、オリジナルなものが少なかった。

正規の出版市場においては、以前はわずかに「BL」傾向のある作品だけが出版された程度だった。たとえば漫画家・韓露の『長安幻夜』である。2012年には「BL」マンガ・小説連載誌『男朋友』（『彼氏』）などが刊行されたが続かず、オリジナルな「BLマンガ」は依然として少なかった。

しかし、近年はマンガサイトの台頭に伴い、中国におけるオリジナル「BLマンガ」はここ数年、ネットにおいて発展の速度が上がってきている。オリジナル「BLマンガ」は依然として「BL小説」ほどの人気ではないが、その数と質の上昇に伴い、今の中国では、オリジナル「BLマンガ」も「BL文化」の中の一隅を占めるようになっている。

本研究では、近年のマンガアプリである「快看漫画」と「ビリビリ漫画」を対象として調査を行った結果、それらのネット「BLマンガ」では基本的に、あいまいな男同士の強い絆ではなく、はっきりと「男同士の恋愛」を表現していることがわかった。

また本研究では、両サイトにおけるオリジナル「BLマンガ」の性的描写の割合も調査した。

中国第1位のマンガアプリで「BLマンガ」が最も多いマンガサイト「快看漫画」では、2019年頃、複数回にわたって、特定の作品の性描写が告発されたり、サイトが告発されて当局から処罰されるということがあった。調べてみると、ちょうどその時期から、唇が触れ合う直接的なキスシーンや性的描写が減っていた。以前はあった性描写をネットなどで探すと、コメントから、削除された時期と規制が入った時期はほぼ一致しており、当局の規制が性描写に影響を与えたことが推測される。そのせいか「快看漫画」では、男同士の性行為は直接は描かれず、主に前後の展開によって表現されることが多い。だが、かつては、はっきりと裸の場面も描かれていたことがわかった。一方、新興人気マンガサイト「ビリビリ」では、規制が入っていないためか、「快看漫画」に比べれば、創作環境が比較的寛容で、性描写も大胆で、ストレートで激しいセックスシーンまである。

とはいえ、中国のBLマンガのセックスシーンは、その前後の描写を含めても作品全体のせいぜい数パーセントであり、性描写が多いものでは4割を超える日本のBLとは性描写の程度がかなり違うことが明らかになった。日本のBLマンガについては厳しい規制がないため、性描写が多いと思われる。

また、本研究では中国のBLと日本のBLに描かれたゲイ意識について調査した。日本に比べ、中国のBLの方が現実のゲイを意識した表現がなされているように思ったからである。

調査にあたっては、中国側では「快看漫画」におけるオリジナル「BL マンガ」を分析し、2014年の1作と2015～2020年の毎年10作、計61作を対象とした。主人公の性的指向については不明な作品の方が多いが、明確にされている場合には、ゲイは受けである主人公に多く、ノンケは攻めである主人公に多いことがわかった。中国のBLでは、ゲイのアイデンティティは「受け」が背負っており、ゲイとして生きる苦しみは詳細に描写された場面も多かった。また、カップルで見ると、中国BLでは、「攻めも受けも両方ゲイ」というカップルが最も多いことが注目される。

世間一般の人のゲイに対する態度については、中国のBLでは、中立/理解と、嫌悪/無理解、両方が描かれる傾向にあった。親や家族が主人公がゲイであること/男性とつきあっていることを知ってしまった場合には、「受け」の視点から描かれることが多い。日本と比べると、この、親や家族との関係の描写が多いことも中国の特徴であった。これは、中国人は家族意識が強いからだと考えられる。中国では、ゲイであるために結婚しない/子どもを作らないということは、親不孝だと見なされ、ゲイにとってそのことは大きな問題となっている。

さらに、主人公の周りに他にもゲイがいるか、ということでは、恋敵として登場する場合がいちばん多く、次が作中のサブカップルとして登場する場合である。恋敵について調べると、中国では、女性よりも男性が恋敵として登場することが突出して多いことが特徴である。

一方、日本のBLマンガについては、「このBLがやばい！」ランキング2019年度から2021年度にかけての毎年トップ10のBLマンガ、総計30作のBLマンガを対象にゲイ意識を調べた。結果は、中国より日本のほうが主人公の性的指向が明確に表明されることが多いことがわかった。

全体の中でゲイの主人公が占める割合は中国も日本も同じくらいで、日本の場合も受けがゲイとして描かれる場合が多い。だが、日本のBLが中国と大きく違うのは、ゲイであることの苦しみを描いた作品がきわめて少数であるということだ。また、カップリングにおいて、日本で最も多い組み合わせは「攻めがノンケで受けがゲイ」という場合で、「両方ゲイ」はほぼ見られず、中国の「両方ゲイ」が最も多い、という組み合わせとは明らかに差がある。

中国の「BLマンガ」は日本より、親や友人など周りの親しい人の態度の変化の描写が多かった。しかし、日本のBLマンガでは、親/家族が主人公がゲイであることを知った時の葛藤が描かれることはほとんどなく、世間一般の人のゲイに対する態度については、中国に比べ、支持/理解が多い。これは日本が中国よりは（少なくとも表面的には）ゲイ差別が少ないことや、近年、LGBTへの理解が進んできたことが影響しているのかもしれない。

また、主人公の周りのゲイでは、恋敵としての登場が最も多いのは中国と同じだが、日本ではサブカップルとして他のゲイが登場することはほぼなく、かわりに、主人公が恋愛相談をする相手、あるいは恋愛の傍観者として登場するゲイが多い。また、中国と違って

日本のBLにおける「恋敵」は、女性の方が男性より多い。「快看漫画」では、男性の恋敵の方がはるかに多かったのも、そこは日本のBL漫画との違いといえる。

まとめると、現実において中国のゲイが社会的に厳しい立場におかれているせいもあるが、中国のBLマンガでは、「両方ゲイ」のカップルがもっとも多く、この社会でゲイとして生きることの苦しみや、家族へのカミングアウトの問題なども描かれる。恋敵も男性であることが多い。それに対して日本のBLマンガでは、もっとも多い組み合わせは「攻めがノンケ、受けがゲイ」のカップルで、ゲイとして生きることの苦しみが書かれることは少ない。恋敵も女性が多い。

これらのことを考え合わせると、日本のBLマンガの方がより異性愛中心主義といえ、どうしても現実のゲイ差別問題が顔を出してくる中国のBLマンガより、フィクションとしての性格がより強いといえるのではないだろうか。

これらの調査結果は、「中国の方が、創作物と現実のLGBTとの距離が日本よりも近いのではないか」という仮説を裏づけるものだといえる。